

〔1983年度秋季〕

## 研究発表会ルポ

(10月26～28日 工学院大学)

今回の大会は、去る10月26日、27日、28日（見学会）の3日間にわたり工学院大学で開催されました。

初日はやや肌寒い感じでしたが、発表会、見学会とも幸い天候にも恵まれ、また、会場が東京副都心、新宿という誠に交通の便にも恵まれ、数多くの会員が参加されました。

### 特別講演

今回の特別講演は、26日の午前に1件、午後にもう1件企画されていました。

午前の渡辺氏の「人工知能ロボット」の講演では、「転移(位)」の話が中心で、われわれ人間は、赤ん坊の頃から自然(容易)に「転移現象」を身につけているが、ロボットにこの「転移現象」をいかに移植(転移)させるか? 講演の中では、「赤ん坊のミルク」の話から、われわれ「OR研究者の数学」の話へ、そして、「ロボットの人工知能」の話へと、上手に話を転移されていたようですが、ロボットに知能をもたせることは、まだまだむずかしい話のようでした。

この講演の直後に、第1回日本OR学会学生論文賞の表彰式が行なわれました。(詳細は11月号参照)

午後の今井氏の「流体数学の発想法」の話では、起の部分は、非常に快調な流れで、面白く拝聴したのですが、承の部分では、事前の打ち合せが不十分だったようで、OHPの設定等で、時間的に手間どり、聞き手の流れも乱れ、「多くの現象は、流体现象として把握することができ、流体数学の解析を応用して理解できる」という転結の部分は、もち時間の関係で、急流になってしまい、くわしい話が聞けず大変残念な思いをしました。

### 特別テーマおよび一般研究発表

研究発表は、4会場同時進行なので「研究発表会ルポ」とはいえ、断片的報告であり、かつ、ライターの不勉強から生じる独断の感想であることを、お許し願います。

今回の特別テーマは、「交通とコミュニケーション」でしたが、このセクションの研究発表は、初日の午前3件午後8件(地域・環境を含む)だけで、発表件数も少なく、自分が聞きにいった時間帯(午前)は、その会場の参加者も30人程度で「特別テーマ会場」としては、低調に感じました。

ペーパー・フェア部門は、研究部会中間報告が6件、

研究発表が3件と、研究発表が少ないのが残念でした。

研究部会の中間報告は、ふだん自分の参加していない別の研究部会の活動状況を知るいい機会ではありましたが、各研究部会の月々の活動状況が、毎月発行されるこの雑誌に報告されており、最終活動報告でなく、中間報告を、この貴重な「研究発表会」の場で行なうべきかどうか、ペーパー・フェア部門の研究発表件数の多いときは、一考を要することと思いました。

次に、一般研究発表の中で印象に残った2、3について、感想を述べます。

1つは、阪本雅司氏(大阪工大)等の「システム・ダイナミクス法による大学発展の要因分析」(春の研究発表会の続き)で、インプット要因・アウトプット要因ともに大変多く用意されており、なんとか上手に整理できないものかと感じました。そして、いくつかのシュミレーションの結果を示され、学費(学生納付金)が高額なほど大学は発展する(一般的にと思うが)と、報告されていました。

伊藤清佳氏(川崎製鉄)等の「電力デマンド契約システムの確立」は、研究発表を聞いている段階では、普通の予測の話で、過去の大量データをもっており、前年度の予測と実績等から、来年度の電力量を予測するのは容易に確立されるだろうと思っていました。ところが、質疑・討論の段階でいろいろ周辺事情が説明され、これではとても複雑な状況のもとでの予測の確立であり、まさに、確率の予測としたほうがよいのではと思ったくらいです。背景を知らないとわからないものだとつくづく感じさせられました。

最後にもう1つ、I.M. プレマチャンドラ氏(東工大)の「スリランカの銀行におけるある待ち行列の流体近似モデル」は、題材・解析手法等内容も立派ですが、それ以上に留学生の研究発表として、口頭発表・アブストラクトに、日本語を用いられたことに敬服いたしました。

大会全体を通し、工学院大学の関係者の献身的な努力が印象に残りました。通常の講演と平行してこの研究発表会が行なわれており、会場の設定等ほんとうに苦勞されたことと思います。ただ1つ、ぜいたくな不満をいわせていただければ、用意していただいた一般会員の控室(喫茶室)の出入口が、1か所しかなく、なんとなく窮屈だったことです。しかし、その部屋でお茶等を接待してくれたかたがたも大変親切で、おいしくお茶をいただき

ました。

ほんとうに工学院大学の関係者の皆様には、お世話になりました。ありがとうございました。

(石川明彦 東京理科大学)

## 舞台裏からの報告

研究発表者が舞台での華々しい立回りを演ずる役者とすれば、大会実行委員会は大道具・小道具の舞台作りの役どころといえましょう。役者に心おきなく、気分よく演じていただくための配慮は、①会場の配置がわかりやすく、設備装置が整っていること、②研究発表者と一般参加者との間に研究内容の理解と、ディスカッションを通じての交流が深められる場の提供、③休憩室、クローク等の身のまわりに関するくつろぎの場の設営、等が大切だと考えました。

幸い、工学院大学新宿校舎は、交通の便は非常によくキャンパスもそれほど広くないので、本学をはじめて訪問される方でも迷い子にならずにすむ利点があります。しかし、新館から旧館、さらに南館に至るには、迷路のような通路を経なければならず、学内者でも迷う場合さえあります。そこで、できるだけ会場は1カ所にまとめることから始めました。ところが会期中は大学の授業期間中、おまけに2部(夜間)の授業もあります。昼間の4コマ×8教室の授業担当の先生方に早くからお願いして、そのご好意により、新館の6、7、8階に会場をまとめることができたものの、夜間の授業が平常通り行なわれている状態で研究発表会をやるのですから、あらかじめ会場設営をしておくという具合にはいきません。当日の早朝、あたふたと準備を行ない、発表が終了したらまた元の状態にもどす、これをシンポジウムの日を加えて、3日間繰り返したのです。当然のこととして、朝は戦場のような有様。実行委員6名、学会事務局から3名アルバイト学生24名のメンバーが8時半から9時半までの1時間を走りまわっての会場設営でした。1大学に正会員は普通少なくとも15、6名はおいでになりますが、それがたったの6名ですから、1つの役割に気を配るというわけにはまいりません。ある会場では、発表開始の時刻になってもオーバー・ヘッド・プロジェクターが見つからず、あわてふためいて設置し、発表者の方にご迷惑をかける一幕もありました。ふり返ってみて、よくこの少人数で切り抜けたものだ、冷汗をかいたものでした。

しかし、このような舞台裏の苦勞が実ってか、参加者数326名(発表件数86件、特別講演2件、ペーパー・フェ

ア9件)、懇親会参加者81名、見学会参加者37名、ペーパー・フェアに至っては、比較的広い会場がいぎれでマンムンするほどの盛況でした。このように多数の参加者が得られたことが実行委員会として最も嬉しいことでした。また、今回はじめての試みとして、矢部実行委員長の強い要望から、問題提起セッションを設けました。短い発表時間では語りつくせない話題を時間をかけてディスカッションし合おうということで、テーマを特別テーマの“交通”に絞って行ないました。交通問題研究グループの皆さんに話題提供と進行係をお願いしたせいか、参加者が2日間で、延べ50名、活発な討論が繰りひろげられたことは大きな収穫であったと思っております。

(稲場日出男 工学院大学)

**懇親会**は従来と少し趣向を変えて新宿副都心にふさわしく超高層ビルでやろうということになり、会場の選定に奔走したが、なかなか規定の条件下で引き受けてくれる店が現われなかった。そのような中で、新宿野村ビル49Fレストランパブ“キングスロード”がわれわれの条件を受け入れてくれ会場の選定に終止符が打たれた。

当初参加予定人数は多くても60名程度ということでしたので、会場のスペースもそれに見合うものを選んだ。ところが、いざ懇親会当日(10月26日)になってみると「地上210mからの華麗な夜景が楽しみいただけます」という宣伝文句にひかれてか21名も予想を上回る81名の参加者で会場は熱気むんむんとなった。会場が少し窮屈であるという不満の声もあったが、とにかく盛会のうちに懇親会は午後8時過ぎに散会した。

**見学会**は10月28日約40名の参加者をもってKDDと東京ガスの2社にわたって行なわれた。午前中はKDDのDS-1システムの見学を行なった。これはKDDの国際公衆データ伝送サービス(VENUS-P)のメインフレームであるケット交換システムである。参加者のほとんどが通信の専門家ではないことを考慮して、このケット交換システムに関する一般向けの映画の上映も行なったことは有意義であった。

午後は東京ガスのシステムセンターと地域冷暖房施設の見学を行なった。システムセンターでは主に、首都圏620万軒の顧客情報データベース、経営計画管理に関するシステム等の説明が行なわれた。一方、地域冷暖房施設では東京ガスが新宿副都心高層ビル全域に供給している冷暖房の諸設備およびそれを行なうに至った経緯などの説明が行なわれ、システムセンターとは対照的に重機械類の立ち並ぶ同施設に参加者は見入っていた。

(椎塚久夫 工学院大学)